

森林環境教育プログラム よぼし子の森



1. 自己紹介
2. まるやま組とは？
3. よぼし子の森とは？
4. 実施プログラム内容
5. 教材紹介
6. 普及啓発活動
7. 活動分析シートのまとめ

まるやま組とは

土地に根ざした学びの場 Team Maruyama



高度経済成長期以降の
消費型ライフスタイル

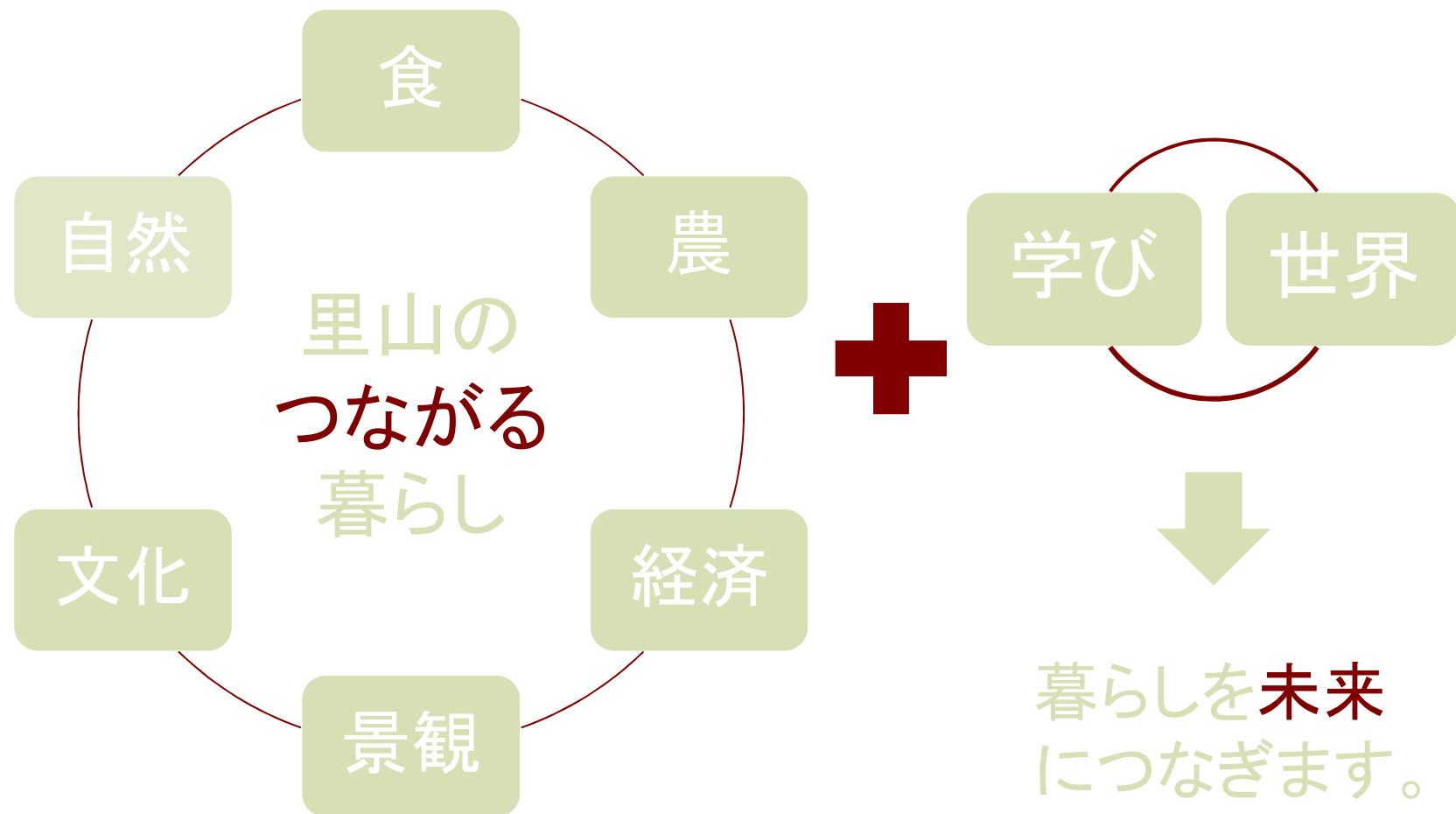
日本人としての
アイデンティティとは

農的な暮らしにみる
サステナビリティ



まるやま組とは

土地に根ざした学びの場 Team Maruyama



まるやま組とは

土地に根ざした学びの場 Team Maruyama



Promoting food based on local and native land each season, we cook and eat local food with local materials at monthly open-kitchen events.



By cultivating fields and maintaining forests, we learn wisdom which is inherited from the local community. We are trying to grow local rice and corn by re-using abandoned fields and footpaths between rice paddies.



We are learning and surveying how many and what kind of plants and creatures are existing around us. Also, we are selected one of the monitoring site of the Ministry of Environment in Japan.



We are learning the system of the marketing of Satoyama community by fair-trade, through processing, producing and marketing of local agricultural products.



By making Satoyama a place for learning various different viewpoints, we provide ESD (Education for Sustainable Development) classes for the local elementary school for natural experience workshops.



We are learning how to preserve the Satoyama scenery, which is often said to be the original scenery of Japan. We hold workshops with students, researchers and local residents.



We look for clues for future lifestyles from traditional wisdom. We also preserve and produce a traditional agricultural ceremony called "Amakoto" with new understanding.



We share the value of life based on the local level with the nation people, with the world and of course with the handicapped. We transmit information in English and aim for the mine and body to be released from impediments.



三井小学校への環境教育支援 まるやま組で得た伝統と科学の知の伝承



学年	児童数		
	男子	女子	計
1年生	2	2	4
2年生	4	1	5
3年生	1	1	2
4年生	3	2	5
5年生	3	0	3
6年生	2	1	3
計	15	7	22

年度	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	計
回数	15	14	11	9	7	10	7	73
時間数	30	28	22	18	14	24	18	154

教育方針 『社会に対応し、**生き抜く力**を身につけた子の育成』を目指す。
～**地域の特性や人材と、小規模校だから出来る**ことを学校づくりに活かして～

環境教育支援授業実績(赤字:よぼし子の森プロジェクト)

よぼし子の森とは？

地域 みんなで地域 子どもを育てる



能登三井はかつて林業で栄えた村。
アテと呼ばれる能登ヒバや杉を育て、建材や
輪島塗の木地を作り、雑木は薪をつくり炭
焼きをする暮らしがありました。

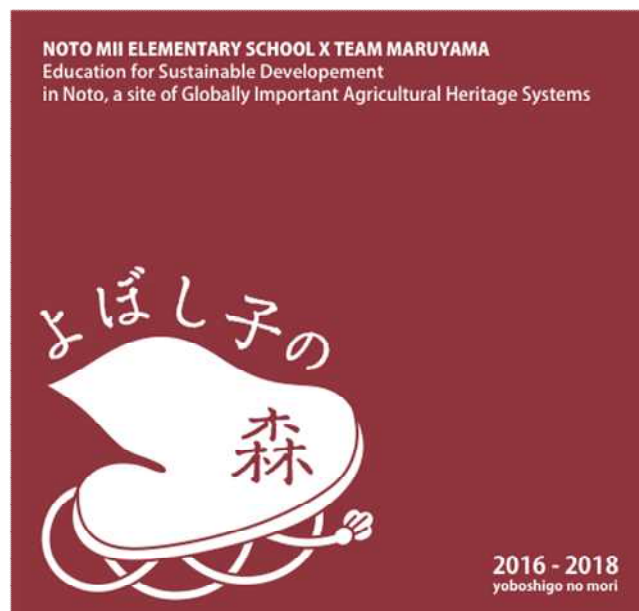
小学校の高台から見渡せば沢山の森が見
えます。そこには今でも間伐をする人、薪を
作る人、しいたけのホダ木を仕込む人、田ん
ぼの脇の陰なぎをする人、木の皮で和紙を
漉く人、チップ工場に間伐材を持って行く人
などがいます。金沢の兼六園の桜の支柱に三
井の大きなアテの木が使われてもいます。

むかし、烏帽子親、烏帽子子というしきた
りがありました。山持ちの親方が若者が成
人するまで仕事をあたえ経済的な援助と
ともに人材育成をする仮親制度だったとい
います。

今、地域の様々な人がつながって、三井のこ
ども達に森のことや知恵を受け渡す場があつ
たらいいなとおもいます。グローバルな社会で
活躍する次世代こそ土地に根ざした学びが
必要です。実の親でなくても地域のみんな
で地域の子どもの育てる。

よぼし子の森。

ゴールは三井のこども達のココロとカラダの中
に森がそだつこと。



よぼし子の森 サポート体制

つながり、かかわり、ひろがる



森林にかかわりのある様々な
技術や知恵を持った人々をよ
ぼし親(先生)に。



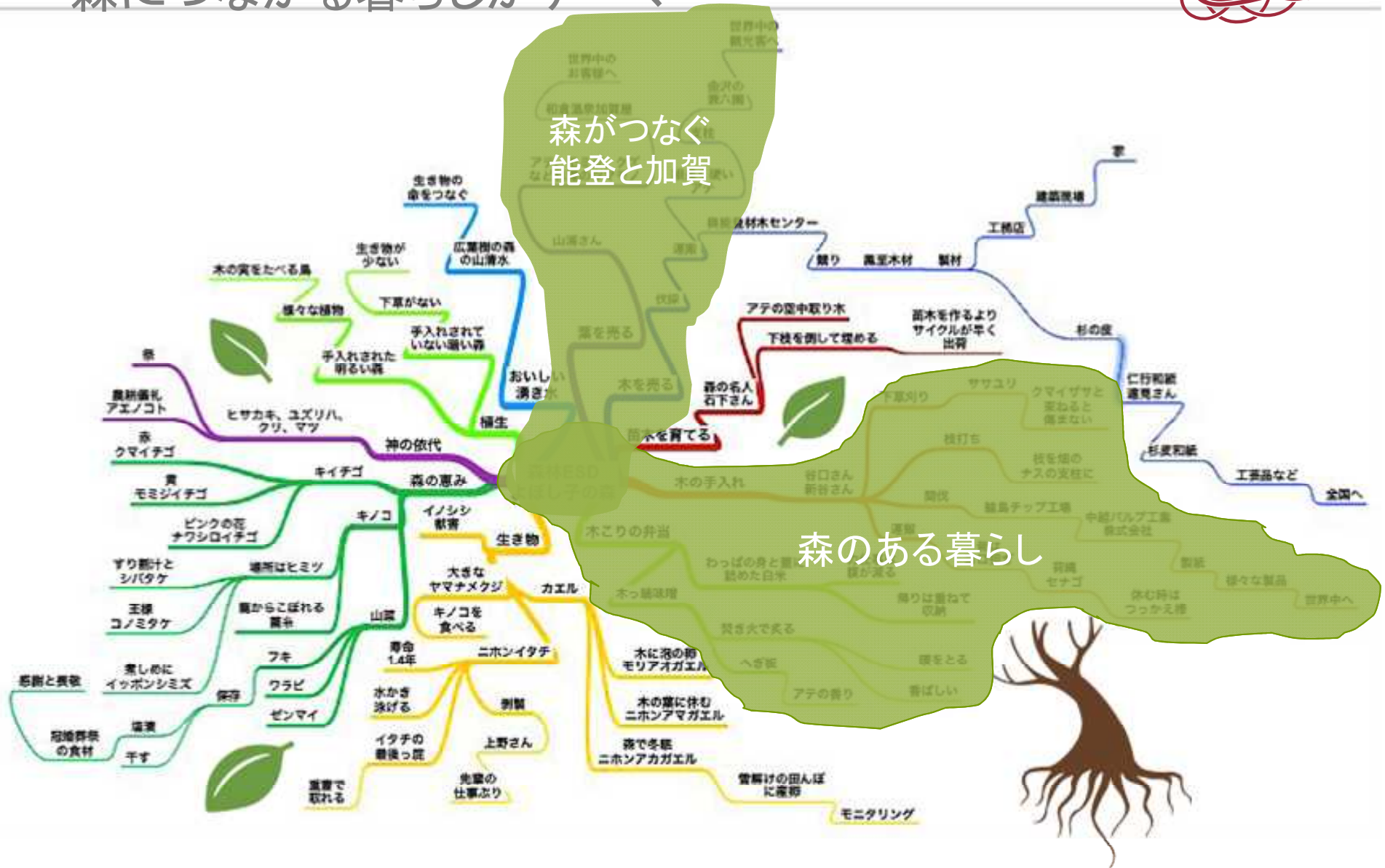
大学や企業、自治体等と
つながりをもち広がりの
あるプログラムに。

よぼし子の森 学びの内容

森につながる暮らしがテーマ



森がつなぐ
能登と加賀

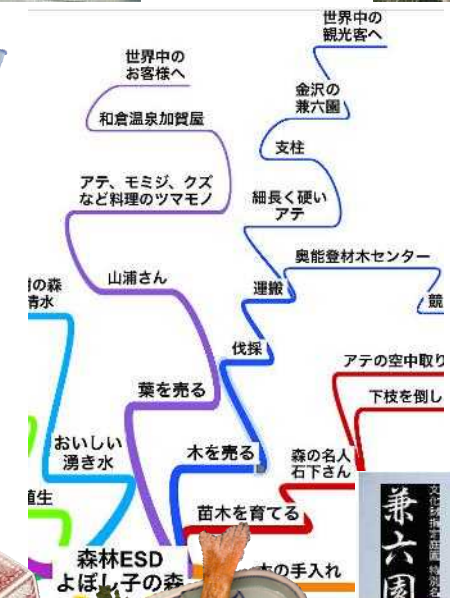
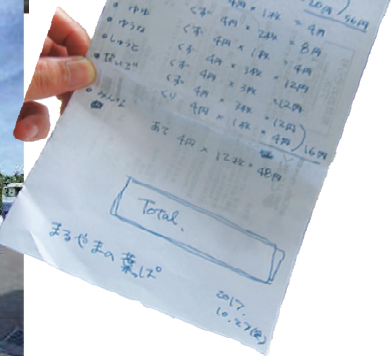




Program 2 森がつなぐ能登と加賀 ムラとマチがめぐりあい世界がひろがる



START



よぼし子の森 ESD教材

アイデンティティを育み、生きる力を引出すために



1. まるやま本草



2. ある木札



3. ポケット図鑑

1. まるやま本草 | まるやま組で取り組んできた植物のモニタリングで明らかになった花暦をタイムラインに、集落の暮らしの知恵を歳時記のように並べた土地に根ざした暮らしの暦。見開きで一ヶ月でおおよそ見られる植物やしきたり、食や住まいのことを土地の言葉を使って解説されている。2. ある木札 | 間伐材の板でできた出席カード。毎回季節の動植物のスタンプが押される。首に下げるとヒノキチオールの香りがする。3. ポケット図鑑 | まるやまで見られる水生昆虫だけが出ている図鑑。全児童数用意されているので携帯して歩くことができる。



4. 活動記録写真集



5. まるやまの白地図帳



6. 落ち葉の音



7. 里山劇場

4. 活動記録写真集 | 「よぼし子の森」で活動した一年間をまとめた写真集。全児童と講師に配布する。また学校、地域用に教科書として活用できるように保存する。5. まるやまの白地図帳 | まるやまの様子を五感で感じて描き込む記録シート。一人一人違うものができ、自分の気づきになる。6. 落ち葉の音 | 落ち葉の虫食い穴を紙巻オルゴールの楽譜に見立てた自然の神秘を楽しむツール。7. 里山劇場 | 低学年向け環境教育劇。野蔬の採り方やキノコを食べる山ナメクジなど里山の生き物のオリジナルパペット。

森林環境教育の普及啓発 金沢大学、日本自然保護協会、OUIKとの連携



日本自然保護協会
THE NATURE CONSERVATION SOCIETY OF JAPAN



UNITED NATIONS
UNIVERSITY
UNU-IAS



世界農業遺産認定への道り
～国連大学と地域の歩み～



朝日新聞

活動分析シートから



児童の変化

- 一つ一つの体験に**つながり**があり、**何のために**活動するか目的を持って活動できていた。
- ふるさとを**誇り**に思う気持ちを今まで以上に持つことができた。
- **多角的に**、また**科学的な**再認識ができた。

先生方の気付き

- 「**教師自ら**が地域の自然や暮らしについての理解を**深める場**でもある」と感じている。
- 子どもたちの住む土地の恵みや価値について**自信を持って語る**ことができるようになった。
- 活動で紹介された本で**ひろがり**を持たせる事が出来た。

活動分析シートから



効果

- **地域の暮らし発**の森林環境教育のひとつの試みができた。
- 児童、教師、地域住民の間に**双方向の学び**があった。
- **多様な主体**のサポート体制で**リアルでライブ**な学びになった。
- **新たな里山のあり方**を子ども達と考えるきっかけになった。
- **即効性**と**長い時間**を経て身につくもの**両方**に目を向けて。

課題・展望

- 児童の**主体的な学習活動**、児童から**地域へ発信**する教育活動へのシフト
- 環境教育を**通常の教科の授業へ活かすための工夫**が必要。
- **企画段階から**学校とプログラム提供側と**綿密な打ち合せ**が必要。ゴールや手法、展開のさせ方などの共有。
- 年度単位の提案型事業でなく**継続性のある仕組み**が必要。

